

をクリック

令和2年度 実践研究奨励援助事業 採用校・研究主題一覧

■ グループ研究

No.	学校名	校長名	代表研究者名	研究主題
【小学校】				
1	鹿沼市立東小学校	鈴木 康夫	谷中 弘美	学校保健委員会の機能を活用した感染症対策 ～新型コロナウイルス感染症防止を目的とした組織的实践～
2	日光市立足尾小学校	松浦 恵子	福田 弘美	言語活動の充実を目指した語彙指導の工夫 ～多層指導モデル(MIM)の实践を中心に～
3	小山市立萱橋小学校	川村 克彦	櫻木 万弓	どのように社会・世界と関わり、よりよい人生をおくる力を 育むために ～学びに向かう力・人間性等の涵養を付けるための自主学 習の在り方～
4	栃木市立大平西小学校	村井 一郎	越沼 有子	目標と指導と評価の一体化による学ぶ力の育成 ～評価方法の共有で働き方改革～
5	下野市細谷小学校	蓬田みどり	藤田 亮	主体的に学習に取り組む児童の育成 ～ICTの活用を通して～
6	塩谷町立船生小学校	坂和 昌生	君島 良彦	自己有用感の高い児童の育成を目指して ～児童会活動を中心とした児童の实践を通して～
【中学校】				
7	鹿沼市立南摩中学校	安田 晃章	大門千恵子	地域から社会へ ～地域から学び、社会に貢献できる生徒の育成～
8	矢板市立矢板中学校	築瀬のり子	小泉 彩	福祉活動の实践を通して、地域に貢献しよう
【高等学校】				
9	栃木県立栃木高等学校	大川 直邦	小林 真人	You Tube による動画配信を活用した授業改善に関する研究
10	栃木県立那須清峰高等学校	薄羽 正明	相良 友久	建設工学科における実習廃材の3R(リユース リデュース リサイクル)の 検討
【特別支援学校】				
11	栃木県立足利中央特別支援学校	島田 謙	佐藤 杏奈	小学部通常学級における防災教育の在り方 ～災害時における児童の安全行動の習得を目指して～

グループ研究<01>

研究主題 学校保健委員会の機能を活用した感染症対策

～新型コロナウイルス感染症防止を目的とした組織的実践～

学校名 鹿沼市立東小学校

校長名 鈴木 康夫

研究者 養護教諭 谷中 弘美

教諭 五反田敦子

教諭 吉澤 涼

(養護助教諭 大塚未歩は令和3年3月31日付で退職)

1 研究目的

本校は749名の児童が在籍する大規模校であり、一度、感染症が拡大すると大きな影響が生じる。そこで、学校医等から組織される学校保健委員会の機能を最大限に活用し、新型コロナウイルス感染拡大防止策を講じることに、児童が安心して教育活動に取り組めるような実践について研究してきた。

2 研究内容

(1) 家庭と連携を図った児童の感染防止対策の実施

- ア 健康観察カードの記入
- イ 児童への衛生指導
- ウ 「3密」を防ぎながらの教育活動
- エ 「手洗い」の時間（ハッピータイム）の日課表への位置づけ

(2) 定期的な学校保健委員会での協議

- ア 国や県、市の感染防止対策の確認
- イ 本校の感染防止マニュアルの作成
- ウ 感染防止を図った教育活動の実践
 - ・運動会…参加者、種目、時間の制限
 - ・宿泊学習…泊数の縮小、方面の検討、移動バスの増便
 - ・持久走大会…1日1学年限定で実施
 - ・授業公開①…1～4校時までを公開、保護者参加人数の制限
 - ・授業公開②…感染拡大のため中止
 - ・卒業式・入学式…参加者の制限、歌の省略、時間短縮
- ・感染防止マニュアルの見直し
- 熱中症防止と感染防止のバランス

「特定警戒」発令を受けて

「緊急事態宣言」発令を受けて

(3) 関係機関等との連携

ア 鹿沼市教育委員会

- ・校長会を通して月1回程度

イ 県西健康福祉センター

- ・必要に応じて

連絡を取り合う。

ウ 学校医

- ・月1回は状況を説明し指導を受ける。



学校保健委員会

3 研究成果

(1) 感染防止対策の徹底

- ・学校保健委員会を機能させることにより、感染防止対策が徹底され、感染は最小限にとどめることができた。また、感染によるいじめ等も発生しなかった。

(2) 児童・教職員の意識の高揚

- ・定期的に委員会を開催することにより、児童や教職員の意識の高揚を図ることができた。

4 今後の課題

(1) 家庭と更に連携した感染対策のあり方

- ・感染に対する保護者の様々な考えや思いを受け止め、共通理解を図った上で、連携を密にした対策をより充実していく必要がある。

戻る

グループ研究<02>

研究主題 言語活動の充実を目指した語彙指導の工夫
学校名 日光市立足尾小学校
校長名 松浦 恵子
研究者 教諭 福田弘美（令和2年度） 教諭 吉新智哉（令和3年度）
 講師 佐藤晴恵 高橋泰久（令和2年度） 柏木唯花（令和3年度）

1 研究目的

本校の児童の会話や文章から、語彙力が不足していることが課題として挙げられていた。各学力テスト等の結果を見ると、多くの学年において国語科における言語的な事項の知識・理解・技能の到達度に課題が見受けられた。

そこで、語彙指導に研究を絞り、全ての教科の学習の基礎となる言語活動の充実を目指すことにした。

2 研究内容

(1) 低学年と特別支援学級での語彙指導
多層指導モデルM I Mへの取組

- ・対象…1、2年生と特別支援学級児童
- ・テスト①「絵に合うことばさがし」
- ・テスト②「3つのことばさがし」
- ・視覚化 ことば絵カードの活用
- ・動作化 手の動作で音を体感できるように



【M I Mの実施の様子】

・アセスメントをもとにし、個々の指導の伸びを確認して個別指導や全体への指導を繰り返す。

(2) 高学年での基本的な語彙指導

①最新版の国語辞典の購入と活用

- ・共通の辞典を購入し、教室に配置
- ・わからない言葉は、どんな教科でもすぐ

に調べることができるように個人で活用。

②ジャンプアップデー

- ・簡単な言語事項に関するプリントを解く。
- ・一覧表に点数を記入し、課題を把握。
- ・自分の苦手なプリントを選んで取り組む。

③新聞活用

- ・小学生新聞三紙購読、新聞コーナーに設置
- ・月一回「新聞デー」全校生に新聞配付
- ・全校集会、授業、家庭学習での活用
- ・ホールに「N I Eコーナー」を設置。



【ジャンプアップデーの様子と新聞コーナー】

3 研究成果

本校では、児童数が少ないため、一人一人の課題を把握し個別の指導を充実させることができた。それにより、少しずつ話すこと、書くことへの抵抗がなくなってきた児童が増えてきた。語彙力に課題があることを全教職員で確認し、令和3年度には、グループの研究成果と資料等を共有して、言語活動の充実に向けて語彙指導に取り組んでいる。

4 今後の課題

低学年からの語彙指導の重要性を再認識した。入学当時から、語彙が不足している児童の実態を見極めて、有効な教材を作成したり活用したりしていく必要がある。

グループ研究<03>

研究主題 どのように社会・世界と関わり、よりよい人生をおくる力を育むために
～学びに向かう力・人間性等の涵養を付けるための自主学習の在り方～

学校名 小山市立萱橋小学校

校長名 川村 克彦

研究者 教頭 櫻木万弓 教諭 高谷圭子

教諭 生澤英実

1 研究目的

学びに向かう力・人間性とは、学校で学んだことを、児童が社会生活に生かせるようにすることである。これは、児童の情意や態度等に関わるものであることから、非常に重要である¹。近年富とみに言われているのは、授業と生活との乖離である。近年とは書いたが、実際にこのことは、ルソーがその著書エミールの中でも述べていることである。そこで、学校で学習した内容を生活にいかにつけるかを主に考えた。よりよい人生のために「学習即生活」となるように自主学習（宿題）の在り方を考えていきたい。

2 研究内容

(1) 授業時に

宿題で「考えてみましょう。」と言ってできるなら、こんな楽なことはない。授業を行う際に大切なのは、「しっかりと問題に向き合い、一人一人が考えること。」である。授業時に、一人一人に考える力、つまり思考力をつけなくてはいけない。

(2) 自主学習（宿題）として

授業で学んだことを、学んだことだけで終わらせていると、本当の学びにはなっていない。つまり、「知っているだけでは、知らないのと同じ」ではないのか。という疑問から始まっている。「学習即生活」になるためには、学校で学んだことを家庭生活に持ち込む必要がある。4年社会は、学校で学んだ自然災害の避難のことを元に自分の家の避難袋の様子やその置く場所も考え



4年社会 自然災害から守る

ている。学習を机上の空論では終わらせていない。また、5年の算数では人口密度について学習しその後自主学習で自分の教室の人口密度を求めている。今までのような「○頁の△番をやってきましたよ。」ではない、生きた学びを追究した結果である。



5年算数 人口密度

3 研究成果

「水のかさ」の学習で実際にお風呂に何L入るか行ったり、長さを家で実際に測るなどして行う自主学習は、授業での学びと生活を結びつけるのに有意義なものであった。また、「ノート1頁」書いてくるという量を決めたが、子供たちはそのことを行う理由やその時の自分の考えなどを書き、絵でも示したりするなど、様々な表現力の育成の手助けにもなった。今までの、自主学習という名の「同一漢字1行練習」をしてきましたなどは、比べものにならないほど、生活に直結した主体的な学習となった。

4 今後の課題

全員が「今日この事を習ったからこれやってみよう。」というようには、いかない事が多い。振り返りの段階で、どんなことができるのかを、その発表によって他の思いつかない児童への手助けとしていきたい。また、その内容からまた疑問がわき、追究のスパイラルになるようにしていきたい。

グループ研究<04>

研究主題 目標と指導と評価の一体化による学ぶ力の育成

～評価方法の共有化で働き方改革～

学校名 栃木市立大平西小学校

校長名 村井 一郎（令和2年度）

研究者 教諭 越沼 有子 ・ 教諭 櫻井 由美子 ・ 教諭 横山 紀一

1 研究目的

日々の授業において、教師が学習目標を明確にし、目標を達成させるための指導及び指導に生かす評価という視点を重視することが学ぶ力の育成には大切である。また、評価の工夫改善・具体的な評価方法の共有化と協働を進めることは業務の効率化も期待でき、働き方改革にもつながるのではないかと考えた。

2 研究内容

(1) 目標と指導と評価の一体化

基礎的・基本的事項の読み合わせを実施

(2) 学ぶ力の育成

分かる授業の実現に向けたねらいの提示

(3) 評価方法の共有

研究授業をベースにした話し合う研修

3 研究成果

(1) 新学習指導要領の理解と実践

研修についてのアンケートでは、「3つの柱を理解している」に肯定的な回答をした割合が36%から100%に向上した。「指導につながる評価を理解し、実践している」も29%から83%に向上した。校内で文科省のリーフレットなどを活用し、基本的事項の読み合わせを行うことや、教師の不安や疑問を共有する場の設定は有効であった。

(2) 指導案検討について

事前に、研究授業の単元の評価方法、本時のめあてと評価規準（A評価・B評価）を空白にした指導案を配付し、各自で考える方法を取

り入れた。振り返りに、自分ごととして考えることができた、話し合いに参加しやすかった、話し合うテーマが明確になったなどの感想もあり効果的であった。

(3) 補助簿の情報交換

事前に補助簿を見合う機会をもうけることを伝えておき学期の終わりに研修として取り入れた。評価規準が明確にされたものや効率的な見取り方法など、すぐに取り入れたい情報がたくさんあった。初めて他の人の補助簿を見たという感想もあり、好評であった。

4 今後の課題

今年度は、新学習指導要領「3つの柱」など概論の理解を深めることや、教師の不安や疑問を解消することをめざした研修が多くなり、学校全体として具体的な評価方法の共有化まで行うことは難しかった。ただし、それぞれの学年では工夫した取組が見られたので、今後それを全体で共有できるとよいと思う。

また、研究授業を行った2クラス（6年算数・2年国語）で「授業のめあてを理解できましたか」という質問には、児童全員が肯定的な回答をしていたが、児童の自己評価と教師の評価には差が見られ、一致したのはおよそ半分であった。教師の評価はAなのに、自己評価がBという児童や、教師の評価はCなのに、自己評価はAという児童もみられた。このような差を解消する工夫も今後の課題である。

戻る

グループ研究<05>

研究主題 主体的に学習に取り組む児童の育成 ～ICTの活用を通して～

学校名 下野市立細谷小学校

校長名 蓬田みどり

研究者 教頭 藤田 亮、軸丸尚子、中田潤子、飯野泰貴、平石秀邦、上野めぐみ、
吉野圭亮、小林幸佳、倉井郁佳、水町エリカ、北條 恵、五十嵐裕美

1 研究目的

小規模特認校である本校は、1学級の人数が少ないため目が行き届き、きめ細かな指導ができる。一方、少人数のため、児童間の深い学び合いの難しさという課題がある。また、児童は課題や解決方法を教師から与えられることに慣れてしまい、学習に主体性が乏しい実態がある。

そこで、教師が一人一人の児童の様子をより把握することができる本校の良さを生かしながら、ICTを活用した指導方法を取り入れることで、学び合いや主体的な学習への取組が期待できるのではないかと考えた。小規模校である本校の特色を生かしながら確かな学力の定着・向上を図りたい。

2 研究内容

(1) 指導力向上のための取組

①タブレットの活用研修

校内の情報機器の堪能な先生を講師としてタブレットの基礎的な使い方を研修した。情報機器を苦手としている先生のためのタブレットとテレビとの接続の仕方等基本的な使い方から、理科や体育など具体的な授業場面での活用の仕方を研修した。



【タブレット活用研修】

②デジタル教科書の活用研修

各教科のデジタル教科書の使い方を研修した。また、新教科書にはQRコードが採用された。QRコードから参考資料を提示する方法を研修した。

③Zoomの使い方研修

オンラインでの会議システムZoomと使い方の研修を行った。



【Zoomの使い方研修会】

3 研究成果

新年度には、GIGAスクール構想により、児童一人に1台ずつiPadが配付されたが、教員の導入への抵抗感が少なく、円滑に導入できた。

また、多くの授業で、デジタル教科書、実物投影機、デジタル顕微鏡、NHKforSchool等のビデオ教材、教科書のQRコードによる補助資料等を、必要に応じて効果的に使い分ける場面が多く見られるようになった。

4 今後の課題

教職員全体の更なるスキルアップの向上と、iPadの機能やアプリの、より有効な活用方法の検証が今後の課題である。

戻る

グループ研究<06>

研究主題 自己有用感の高い児童の育成を目指して

学校名 塩谷町立船生小学校

校長名 坂和 昌生

研究者 君島 良彦、 村上 勇理、 和田 菜里、 吉田 俊樹、 高塩 容子

1 研究目的

本校は「夢と希望を育み、明るくいきいきとした居がい感のある学校づくり」を学校経営理念として掲げ、「笑顔と『ありがとう』があふれる学校」を目指す学校像として取り組んでいる。

そこで、児童会活動を通して、児童同士が互いに認め合う環境づくりを工夫し、活動意欲の向上を図るとともに、教職員並びに児童同士の承認、賞賛、勇気づけによって、児童の自己有用感を高めることができるよう研究を進める。

2 研究内容

(1) 児童会活動での取り組み

各委員会での活動を定期的に紹介し、全児童に活動がわかるようにする。

主な活動

- (ア) 企画委員会
 - ・児童集会、国旗当番
- (イ) 保健給食委員会
 - ・トイレ点検、掲示物作製
- (ウ) 環境美化委員会
 - ・クリーン作戦、花壇管理
- (エ) 図書委員会
 - ・読み聞かせ、貸出し
- (オ) 広報委員会
 - ・放送、掲示物作製
- (カ) 運動委員会
 - ・体育倉庫の開閉、校庭整備

(2) 異年齢集団による交流活動

上級生が中心となって活動に取組み、リーダー性を高める。

3 研究成果

(1) 児童会活動での取り組み

各委員会の活動の様子を他の児童が知ることができる場面を意図的に設けた。活動を知ることによって、取り組んでいる児童に対して感謝の言葉が何気なくかけられるようになった。特に下級生は上級生の活動を感謝し、「すごい!」「うれしい!」「一緒にやりたい!」等の感想を持つようになった。



▲上級生の活動を手伝う下級生



▲委員会での活動

(2) 異年齢集団での取り組み

異年齢集団による交流活動では、上級生のリーダー性に対して、下級生が憧れの気持ちをもつことができた。信頼感が高まり、上級生も自信をもって活動ができるようになった。



▲異年齢集団による清掃や花苗植え

(3) 児童アンケート結果より

「活気があり、明るくいきいきとした雰囲気である。」「仲良く助け合って生活している。」「仲間はずれがなく、楽しく生活している。」等の回答が87%以上である。児童が楽しく、感謝の心をもって生活している様子が伺える。

また、令和3年度は不登校・長欠児童は0名である。

4 今後の課題

・教職員と児童が自分の行動について認めてくれたと感じる機会が増えてきたので、自己有用感を高めるための取組みを研究し、継続していく必要がある。

・自己肯定感、自尊感情を高める取組みについても、さらに研究・実践を重ねていく。

戻る

グループ研究<07>

研究主題 地域から社会へ～地域から学び、社会に貢献できる生徒の育成～

学校名 鹿沼市立南摩中学校

校長名 安田 章晃

研究者 教諭 大門千恵子 教頭 宮崎喜夫 教諭 矢島隆宏

1 研究目的

1、2学年で、自分たちが住む地域について学び、今まで自分たちを支えてくれた地域にどのように貢献できるかを、生徒自身が考え実行することで、地域社会を担う一人としての自覚と実行力を育む。

2 研究内容

①地域の身近な先輩から学ぶ



地域に根付いた活動をしている先輩から、「南摩夢野菜プロジェクト」の話を聞く。給食の地産自消化について考えることができた。プロジェクトに関わることで、地元ならではの経験、思い出を作る。

②地元食材を商品化し、その価値の変化を学ぶと共に、地域活性化へつなげる



給食に使われず処分される玉ねぎを使い、ドレッシングを作り、商品化する。価値のなかった玉ねぎが、子どもたちの知恵と作業で、価値のある物に変化する。



パッケージデザインやマーケティングの手法「リサーチ」や「ポジショニング」を使い、売り方を検討する。

③地域への感謝を形にする



地域から受け取ってきたものを思い出し、感謝を伝える方法を考え、実行する。地元のカフェを利用させていただき、自分たちでカフェを営業するという形で、学校ボランティアの方々を様々な形でもてなす。

④地域と自分について考える



「自分はこうありたい」を考え、級友の前で発表する。発表を通し、更に自分自身を知る。「自分のため」に生きながらも、同時に「公共のため」に生きることが学ぶ。

3 研究成果

地域にある使える資源（田畑、人材、知恵）を使って学びを深め、目指す自分自身、目指す地域像について考えることができた。活動を通して、世代、立場が違う方々と交流し、目的を達成しようとする時の方法、手段等を考える知恵や技術の一部を学ぶことができた。生徒達の今後の人生を豊かにするための、思考を高めることができた。

4 今後の課題

一過的なものではなく、生徒が地域との繋がりを大切にし、地域への思いが増すことを目標に、中学校が継続してできることについて研究していく必要がある。

グループ研究<08>

研究主題 福祉活動の実践を通して、地域社会に貢献しよう

学 校 名 矢板市立矢板中学校

校 長 名 築瀬のり子

研究者名 教諭 小泉 彩 教諭 鈴木容子 教諭 飯田一宏 教諭 吾妻健太

1 研究目的

本校の福祉委員会は、地域の高齢者施設訪問及び矢板市の福祉行事参加を長年に渡って行ってきた。コロナ禍であっても可能な地域貢献活動を探り、実践を通してボランティア精神や市民性の涵養について研究する。

2 研究内容

(1) コロナ禍でも可能な活動の検討

訪問も行事参加もできなくなる中、伝統を引き継ぎたい思いと、人との交流が減った「こんな時代だからこそ」自分たちが役に立ちたいという思いを具現化する活動を検討した。

また、学校全体に地域貢献の意識を高めるため生徒ボランティアを募ることになった。

(2) 一人暮らし高齢者への花鉢配布

社会福祉協議会で一人暮らし高齢者宅食ボランティアが行われていることを知り、学校で花鉢を作り、宅食ボランティアの方々に弁当と共に届けていただくの案が出て、協議会に連絡すると快諾を得た。

福祉委員とボランティア（1・2年生各クラス5～6人を募集）で花鉢を作り、ラッピングは福祉委員が後日行った。宅食ボランティア分も含め200鉢を作成した。



花鉢づくり

花鉢は社会福祉協議会の担当の方に依頼して宅食ボランティアの方々にお渡しした。

(3) 市内清掃ボランティア活動

もう一つ、人と接触しない清掃活動の実施を決めた。計画づくりを始めた折に、市の商

工観光課からサプライズ花火大会翌朝のごみ拾いの要請を受けたので、福祉委員会の清掃活動として実施した。20人限定の依頼のため、3年生のみにボランティア募集を行ったが、60人を超える応募があり抽選を行った。



花火後ごみ拾い

(4) 校内ちょボラ活動

自分たちの社会を自らより良いものにしていこうとする市民性の育成にはイベント的な活動だけでなく、日常での主体的なボランティア活動を盛んにしたいと考え、「ちょボラ」（ちょっとしたボランティア）を呼び掛けたところ、校内清掃や駐輪場ライン引き、スリッパ拭き、花苗づくりなど様々な活動が展開された。



駐車場ライン引き

3 研究成果

- ①ボランティア募集をすると多数の希望があり、クラス毎に人数制限したり抽選したりした。生徒たちの意欲の高さが確認できた。
- ②コロナ禍で可能な活動を探る中で、大人たちの活動を知ることができ、視野が広がった。大人のモデルは市民性の育成に効果がある。
- ③イベント的な活動から足元の日常生活におけるちょボラ活動につながり、主体的に生活向上に寄与する雰囲気醸成されてきた。

4 今後の課題

我々教職員が従前どおりにとらわれず、生徒たちの意見を聞き、任せて、主体的に行動できる時間や場を如何に提供できるかが重要で、我々の意識改革も含め課題だと思われる。

戻る

グループ研究<09>

研究主題 YouTubeによる動画配信を活用した授業改善に関する研究**学校名** 栃木県立栃木高等学校**校長名** 大川 直邦**研究者** 教諭 小林真人 教諭 宇賀神敦史**1 研究目的**

動画配信の役割として、「主体的・対話的で深い学び」のための時間確保に向けた授業の効率化や、生徒の授業内容復習のための動画のアーカイブとしての機能等が期待されている。これらを実現するために、普段の授業とのつながりを意識した動画配信の活用方法を研究する。

2 研究内容

本校では、ほぼ全員の生徒が大学進学を目指して勉学に励んでいる。

高大接続改革における所謂新傾向の問題に対応するためには、普段の授業の中で「主体的・対話的で深い学び」を実践するための時間を確保することが課題となっている。

また、普段の授業と入試問題との繋がりを意識させ、復習の徹底により高い学力を獲得させることを意図して、普段の授業はもとより、校内実力テストや希望者対象の講座においても、大学入試問題を意識した難易度の高い内容を扱っている。しかし、それらの復習の場面において、生徒が自分一人の力だけでつまづきを解決することが難しいという課題もある。

これらの課題を解決するために、以下のような2つの実践を行った。

(1) 動画配信を用いた授業の効率化

本校の数学科では、各種テストの作成について、難易度は高くとも、①生徒全員が理解すべき問題や、②成績上位者は解けて欲しい問題などのように、意図を持って出題している。また、テスト後は、解説プリントの中に「出題意図」「別解」「多く見られた誤答」等のコメントを書き込んで配付している。解説のための授業の時間確保や効率化とともに、生徒に自分で復習する習慣を身に付けさせることを意図したものである。これらの取り組みを、動画配信を用いることで一歩進め、授業では、①について全員に向けて解説を行い、②については、習熟度に応じた複数の動画を作成し、それらを配信した。これにより、授業の時間確保と効率化を図り、「主体的・対話的で深い学び」を実践する時間を確保するとともに、①の内容の徹底と、生徒の復習の支援も行った。

(2) 動画配信を用いた復習の支援

本校では定期的に難関大学を目指す生徒に向けて希望者対象の講座を行っている。それらの大学の入試問題レベルの内容を扱っており、

生徒一人の力では解き進めることが難しい問題も多く含まれているため、各々の生徒の思考過程に合わせて適切なタイミングでヒントを出すなどの支援を行いたいと考えているが、一斉授業の形態では、それが難しかった。解説動画を作成し配信を行うことにより、①解説の導入部だけを視聴し動画を一旦止めて自分の力で再度解き直してみる、②1問につき30分程度じっくり考えてから解説動画を視聴するなど、生徒それぞれの思考過程に応じた取り組みを可能にした。

また、普段の授業の内容においても、動画配信による復習の支援は可能であると考えられる。本校では昨年度、コロナウイルスによる休校期間中、生徒の「学びの保障」のためにYouTubeによる講義等の動画配信を行ってきた。その際に作成した豊富なコンテンツの中から、今年度の授業進度に合わせ、生徒の復習に役立つ動画を紹介する取り組みを行った。「倫理・政経」の授業用に作成した動画の中から関連する分野を1年生の「現代社会」の復習用に紹介することなどを行った。

3 研究成果

(1)に関しては、授業の時間確保や効率化を行うことができた。また、難易度の高い問題について、解説プリントだけでは自分で解き直すことに時間がかかり諦めてしまう生徒も見うけられたが、動画配信を行うことでそのような生徒が減少した。

(2)に関しては、各々の動画の再生回数は200~300回となっており、生徒からは「分からないところを何度も確認できて良い」という声が寄せられるなど、復習の支援について効果をあげることができた。

4 今後の課題

今回行った取り組みを継続的、かつ、組織的に行っていくことが課題である。その上で、

(1)に関しては、確保した時間で「主体的・対話的で深い学び」に向けどのような活動を行っていくか、また、(2)に関しては、今後の更なるコンテンツの充実と、それらを有効、適切に活用するシステムづくりが課題である。

戻る

グループ研究<10>

研究主題 建設工学科における実習廃材の3R

(リユース、リデュース、リサイクル) の検討

学校名 栃木県立那須清峰高等学校

校長名 校長 薄羽 正明

研究者 教諭 相良 友久 教諭 酒井 祐貴

1 研究目的

実習では専門の技術・技能を身に付けるためにもものづくりや実験を行う。その際に、多くのコンクリートガラや木片等が排出される。これらは、これまで廃棄物として処理してきた。そこで、この廃棄物の再利用を検討し、省資源化や生徒の環境意識の高揚を目指す。

2 研究内容

(1) コンクリートガラの再利用検討

コンクリートを学ぶ実習では、生徒は実際にコンクリート供試体を製作する。このコンクリート供試体は圧縮試験を行った後は通常、廃棄物となってしまふ。(写真1)

この供試体が廃棄物になってしまうことに着眼し、再利用を検討した。今回は次の2つを実践した。

1つ目は現在、課題研究でインターロッキング舗装を行っており、本来、ブロックと他の部分の境界には地先ブロックを置くが、リユースとしてコンクリート供試体を代用すること。

(写真2) 2つ目は原型を留めていない、ぼろぼろのコンクリート供試体をプランターの敷石として利用することである。(写真3)



写真1 廃棄物



写真2 インターロッキング舗装



写真3 敷石として利用

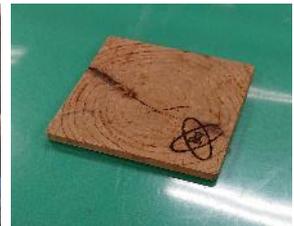


写真4 木製コースター

(2) 木材の再利用検討

実習では木材加工を行い、木材の性質を学んだり加工技術を学んだりしている。この木材加工では、木材が廃棄物として出てしまうため、角材を薄く切り、「コースター」を作成した。

(写真4) せっかくなので、校章の焼印を押してデザインを整えた。

3 研究成果

これらの廃棄物を再利用することにより、資材を新たに購入せずにもものづくりができることが体験できた。また、今回の再利用では、特殊な工具や装置などを使わなかったため、簡単に再利用の活動ができた。

また、インターロッキング舗装は校内の多くの人が通行し、コースターは配布をし、使ってもらった。再利用の活動をして、人々に喜んでもらえることを子どもたちが感じる事が出来たと思う。

4 今後の課題

再利用を検討し、廃棄物を加工し、利用したが、廃棄物の量が多い。特にコンクリートについては廃棄する量が多いのが現状である。そのため、今回の研究内容だけでなく、継続して他の再利用方法を検討していくことが環境問題への取り組みや、未来を担うエンジニアの育成に必要不可欠であると感じた。

グループ研究<11>

研究主題 小学部通常学級における防災教育の在り方

～災害時における児童の安全行動の習得を目指して～

学校名 栃木県立足利中央特別支援学校**校長名** 島田 謙**研究者** 教諭 佐藤 杏奈、 椎名 晶子、 影山 淳子、 川田 泰弘、 宇賀神 恵**1 研究目的**

(1) 教員が地震災害時の危険を理解し、防災に必要な知識を児童に伝えるための指導法の確立を図る。

(2) 地震災害の事前・事後学習や訓練を通して、児童が安全行動を身に付ける過程を評価する方法について研究する。

2 研究内容

(1) 教員が地震災害時の危険を理解するための「安全点検表」の作成

教室内の具体的な危険箇所を把握するため四方の写真を撮り、宇都宮地方気象台が地震で起こる危険として挙げる「上から物が落ちる」「横から物が倒れる」「横から物が移動する」の三項目に写真を振り分けた安全点検表を作成した。年2回実施される訓練がある月の始めに、教室の教員間で確認を行った。

(2) 事前・事後学習の「学習指導案」の作成
目標は全学年に共通して「地震時の危険を知る」「緊急地震速報を聞く」「だんご虫の姿勢をとる」の三つに精選し、指導内容は各学年の発達段階に合わせて教材・教具を工夫し、系統立てを行った。授業後は、目標や内容が適切であったかについて評価を行い、改善を重ねた。

(3) 教員が訓練時に的確な言動をとることを目指した「役割分担表」の作成

児童が授業で学んだことを訓練で実践に移せる環境を整えるため、訓練の時系列に沿って、教室内の教員がどの児童に対してどの様な支援を行うかについて、具体策を記載した役割分担表を作成した。訓練後は、教室内の教員で

評価を行い、役割通りの動きが難しかった場合は調整を行った。

(4) 児童が安全行動を身に付ける過程を検証する「評価表」の作成

訓練後の児童の変容を考察するため、評価項目に学習指導案の目標を取り入れた評価表を作成した。訓練後、クラスの教員が目標の達成度合いについて、5段階の数字による評定と具体的な変化の様子を記載することで評価を行い、次回の訓練に向けた安全点検表と学習指導案、役割分担表の見直しに取り組んだ。

3 研究成果

安全点検により、教室の教員間で危険箇所の共通理解を図り、互いに注意喚起をし合うことで防災意識を高めることができた。また、学年の実態に合わせて工夫した視覚支援等を取り入れた学習により、大多数の児童が三つの目標を達成することができた。更に役割分担により訓練では教員とともに児童の動きが円滑になり、大多数の児童に安全な行動のとり方が身に付いた。最後に、評価により取組全体の改善を図るPDCAサイクルを確立することができた。

4 今後の課題

様々な災害状況下における教員の防災意識や指導力、児童が自らの判断で安全行動をとる力等の更なる向上を目指し、今後は教室以外の場所や安全な場所への避難等の観点を取り入れ、目標の設定を高めていく必要がある。